

船となりました。彼等三人は何の罪で残されたのかは分かりませんが、後で聞いたところでは三人共処刑されたと言うことでした。

五月十四日佐世保港着、五月十八日懐かしい我が家へ帰りました。しばらく静養した後、我が家の農業を始めました。そして昭和二十二年四月四日結婚し、子供も三人の娘ばかり、長女に婿を取り、現在に至っておりますが、昭和二十二年「勅令第一号」にて我々旧憲兵の者は内閣総理大臣名ですべての公職役職の就職は禁止されたのです。

この公職追放も、その後この通達が解除され、昭和三十年以降数々の公職に就きました。幾多の表彰状、感謝状等を授与され、現在も恩欠団体の役員として、過ぐる大戦において護国の霊となられた幾多の戦友の御冥福を祈っています。

あれから六十年を経た平和な日本を末長くあることを祈っています。

軍隊に入隊して御奉公せねばと、むずむずしている時の第二乙種は、悲しい思いでいました。

私は、大正十（一九二一）年五月三十日、新潟県の米どころ長岡市の農家の七人兄弟の四男として生を受けました。男五人女二人の兄弟でしたが、父母は米作り一本の農業で、七人の子供を養育してくれました。生活は楽ではありませんでしたが、当時は子供の六人、七人は当り前でしたから、苦しい中で一生懸命働いてくれました。兄達もそれぞれ職に就いて両親を助けましたし、私も学校を卒業すると同時に薬局に勤務致しました。

国際情勢はいよいよ緊迫し、昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃により太平洋戦争の勃発となりました。慌ただしいその年末の十二月二十五日、私にも教育召集令状が届き、新発田にある歩兵第七十六連隊補充隊通信中隊に入隊しました。本来教育召集は三カ月間ですが、戦局が戦局だけにそのまま戦地に送られて、二度と家族と会うことは出来ないかも知れないと私は覚悟しました。家族

衛生兵の命拾い

東京都 花井 菅 治

「天に代りて不義を打つ、忠勇無双の我が兵は」という軍歌が流れ、出征兵士を送る風景が見られる毎日でした。

昭和六（一九三一）年九月十八日、満州事変が勃発し、戦火は満州全土に広がり、その余波は飛火して上海事変となり、外交関係が緊迫、ついに昭和十二年七月七日、蘆溝橋付近で日支両軍が衝突しました。こうして支那事変が勃発し、見る見る中に北支から中支、南支と中国全土に戦火は広がって、日本全国が戦時体制になってしまいました。青年も壮年も赤紙召集で御国のために召されて毎日のように出征して行きました。私が徴兵検査を受けたのは、昭和十六年七月でした。

徴兵検査の結果は残念ながら第二乙種でした。若者として国を挙げて戦っている時、一日も早く

の思いも私と同じ思いだったと思います。

当日は両親はもろろんのこと、親族や近所の方々も長岡駅まで見送って下さいました。両親は涙一つ見せませんでした。万歳万歳の声に思わず涙が頬を濡らしました。この日入隊したのは三十人でした。三カ月間が陸軍病院で衛生兵の教育が行われました。寒い時期でしたから軍事教練は身にこたえました。

昭和十七年二月二十五日、教育召集終了と同時に、臨時召集により第一機関銃隊に転属となりました。思った通りでした。この日から本格的な訓練が始まりました。軍人勅諭や五カ条の暗記から朗読、毎日びしびし鍛えられました。軍隊は厳しいと聞いていましたが毎夜点呼の時は叩かれ殴られ、特に男の世界で時には涙を流すこともありました。

五月二日、北支河北省塘沽港水上勤務第一百一中隊要員として転属を命ぜられ、八十人が新発田駅から列車で広島まで移動しました。五月四日、

宇品港から貨物船に乗船し、関門海峡から東支那海に出て黄海に入り、船中四泊、五月九日塘沽港に入港し直ちに上陸、第十一中隊に編入され、塘沽港付近の警備並びに揚陸勤務に就きました。

この地区には約八百人の兵隊がおり、私は兵営内の医務室勤務を命ぜられ、衛生兵として仕事を手伝うことになりました。軍医一人と衛生兵三人が毎日のように身体検査に従事しました。七月八日衛生一等兵に進級し、やっと兵隊気分になり仕事にも慣れました。衛生兵として一生懸命がんばったお陰で十一月八日、精勤章を付与されました。

昭和十八年五月一日、暁部隊青島分遣隊に配属されましたが、五月五日、船舶工兵第十二連隊に転属のため塘沽の本隊に着隊しました。行先は分からないまま五月十五日塘沽港を出発、五月十九日上海の昭和島に到着、上陸し、五月三十日船舶工兵第十二連隊第三中隊に編入となりました。この昭和島では、輸送船に積み込む物資の調達や積み降しの仕事で船舶工兵隊としての任務に従事し

潜水艦の攻撃に備え、毎日交代で甲板上での見張りが続けていました。果して無事目的地まで到着することが出来るだろうか。陸の上なら逃げるこゝとが出来ることが、海の上では逃げる場所がないので不安でした。恐らく全員が同じ気持ちであったであらうと思われました。

船内では毎日手持ち無沙汰でわいわい騒ぐこともありましたが、どこでどんな戦争をするのか、果して内地へ帰ることが出来るのかと云う不安が、常に心の片隅にありました。台北の外港と云われる基隆港で物資を積載した輸送船は、海が荒れることで有名なバシー海峡を通過し、一路南下しました。

途中フィリピンのマニラ港に寄港し、食糧等を積載しました。束の間の休息でした。マニラ港を出港した輸送船はさらに南へ走りました。碧い海、青い空、気温は上昇する、船内はむんむんするが、甲板に出てうろろは出来ません。ボルネオ島の東を通過してセレベス海を通り、赤道を通過して東

ました。

この頃支那大陸でもアメリカ軍の援助により、支那軍の反撃も強くなったことを、それとなく耳にすることもありました。くわしくは分かりませんが、南方においても連合軍の反撃も日増しに強くなったことも耳にしました。

七月二十七日、準備を整え八百人の兵隊は輸送船に乗船し、上海港を出港しました。アメリカの潜水艦攻撃を警戒して、輸送船の両側には駆逐艦が護衛しての出港でした。行く先は南方と云うことでしたが、南方のどこと云う地名は私達には分かりませんでした。途中台湾の基隆港に寄港し、バナナ、パイナップルや食糧を積み込んで出港しました。

八百人の大部隊に、衛生下士官一人、衛生兵三人が軍医一人を補助しておりますが、船の中でも船酔いを始め種々の病気で、衛生兵はゆっくりする暇はありませんでした。駆逐艦が警戒はしていますが、万一に備え輸送船自体でも敵の空軍機や

部ニューギニアの近くにあるニューブリテン島のラバウルに到着したのは八月三十一日、上海を出港してから一カ月船の旅でした。戦時中ではなければ周囲の島々を見物しながらのすばらしい船旅であつたらうと思えます。

毎日が戦戦兢兢ですわ「敵機発見！」と叫ぶ、その時は必ず敵の潜水艦も近くに来ており、襲撃を受けなかったのは、二隻の駆逐艦の護衛のおかげと思えました。この頃ラバウルには、日本軍は十方を越す兵力を保持していたと云われておりました。海上輸送中、残念ながら一人が急性大腸炎で死亡しましたが、ほとんどの兵隊は元気でした。

ラバウルに上陸早々、米軍機の空襲を受け、その空襲はその後毎日のようにやって来ました。海からはアメリカの軍艦の艦砲射撃が連日のように撃ち込まれ、防戦が大変でした。ラバウルに来てはじめて戦争の悲惨さを痛感し、これが戦場だと改めて認識させられました。

海上輸送が困難になつて、糧秣が減少し、米の

飯が食べられないこともありました。食糧が不足した時には島に生えている椰子の木の根や、米軍機の空爆により浮いている海の魚を拾って食べる日もありました。その度ごとに他の島の日本軍のことを考え、同じ苦しみを味わっているであろうにと心細く思うこともありました。

空から海からの攻撃により負傷する人も多く、衛生兵の仕事は休む暇もありませんでした。激戦の最中、衛生兵下士官候補教育を受けるため、私達二人内地に帰ることになりました。部隊の方々と別れ、十月二十五日、駆逐艦一隻に護られた貨物船に乗船しラバウル港を出港しました。この船には他の部隊から派遣された下士官候補生も乗船し三十人位になりました。二カ月前通ったであろう広い海原を日本本土に向けて輸送船は航行しました。

あの激戦の中、ラバウルはいつまで防衛出来るだろうか、私達が帰るまで維持出来るだろうか、いやいやこの輸送船が無事日本本土に到着出来る

東部第九十部隊に転属を命ぜられました。この部隊でも下士官候補生として教育は継続されて、衛生兵としての基本教育を受けました。訓練、実務、教育の毎日でしたが、八月三十一日をもって下士官候補教育が終了となりました。

九月一日、本隊に帰隊のため石巻市を出発、広島へと向かいました。九月四日、広島の本隊に到着、第三中隊に編入を命ぜられ、九月二日付けで、衛生伍長に任官しました。また十月九日付けで本隊付きを命ぜられましたが、ラバウルの本隊に戻る状態ではありません。当時は関東軍が満州から南方へ転用される部隊が海上輸送の途中、台湾沖でアメリカの潜水艦に次々と撃沈されている状況でしたから、到底ラバウルへ帰ることが出来ませんでした。

十月二十五日付けで、山口県下松市櫛ヶ浜にありまず機動輸送隊補充隊に転属を命ぜられました。この地で衛生下士官として衛生業務に従事すると共に、衛生兵の教育をも担当致しました。

だろうか、不安な気持ちで語り合いました。途中何回となく攻撃を受けましたが、十二月一日、宇品港に無事到着することが出来ました。一同ほっとしました。私達は広島陸軍病院に直行し教育を受けることになりました。その間故郷に帰ることも許されませんでした。

十二月一日付けで私は兵長に進級しました。広島陸軍病院では衛生下士官になるための学問、実地訓練の両面の教育を受けました。その間脳裏からはなれないのはラバウルの戦友達のことでした。がんばってと祈りながらも私は毎日不自由なく食事しているが、ラバウルの戦友達は飯は食べているだろうか心配でした。

広島陸軍病院にも、第一線で負傷した人達も次々と送られて来ます。それを見るにつけ衛生兵として内地に帰って来ている我が身は幸せだと何度思ったかわかりません。毎日神仏に手を合わせました。

昭和十九年七月一日、宮城県石巻市にあります

戦局はますます緊迫して来たことを感ずるようになりました。営内の仕事の主であるため外の状況がほとんど分かりませんが、慌ただしい空気で察することが出来ました。昭和二十年八月一日、衛生軍曹に任官しました。

八月六日早朝、広島に新型の爆弾が投下されたことは、山口県の下松市で知りました。八月十二日、広島に投下された爆弾により被害者が多数出ているとのことで、防疫作業を命ぜられ下松市を出発しました。ところが宇品の暁部隊の軍医部長より、防疫よりは宇品小学校に被爆者が多数収容されているので、軍医一人下士官二人、衛生兵十人で、直ちに野戦病院を開設し治療に従事せよとの命令を受け、宇品小学校に急行しました。

なんと惨たらしいこと全身火傷した大人、子供が収容され苦しんでおります。まるで化け物のようでした。さあ火傷の手当をと、軍医さんを始め衛生兵一同治療に当りました。その時までは原子爆弾であることも、被爆者がどれ程いるのかも分

からないまま、一生懸命に当りました。

顔も水脹れで化け物のようになっていて誰が誰だかわからず親が子供を探しに来ては分らず、うろろうろしていると化け物のような顔の中から「お父さん、お父さん」と呼ばれて始めて妻が子を知るといふ悲惨なものでした。火傷ですから水で冷してやりますが

「痛い痛い」と泣き叫ぶし、次々と被爆者は担ぎ込れて来るし、治療中に死亡する人も毎日多数出ます。警察官や消防団の方々が火葬して下さいました。

死亡する前に名前を聞いておいて名札を付けておきます。死亡しますと名前が分からなくなりまので、火葬した遺骨の一部に名札を付け石炭を入れる缶の中に納めました。身内が探しにきまずと「その石炭缶の中に有りますので探してみして下さい」と応対するのが精一杯でした。

喉が乾いて「水々」と叫びながら死んで行く人達の叫び声が今でも忘れられません。小学校はま

でくれました。

広島で教育訓練を受け、宮城県石巻市に転属、九月一日石巻市から広島市へ、海上輸送が困難のためラバウルへ帰ることが出来ず、山口県下松市の櫛ヶ浜の機動輸送隊補充隊で勤務していたので、広島島の原爆投下に遭うこともなく、むしろ原爆被災者の尊い命を少しでも救うことの出来る治療のお手伝いが出来た。私はなんと幸運であったろうか。神仏のおかげと姉が苦勞して作ってくれた千人針をそっと撫でました。

ラバウルで別れた本隊の皆様は消息は知ることは出来ませんが、終戦当時の兵力は九万六千四百人、戦死者は三万五百柱と後日発表されました。願わくは全員復帰したであろうと、願わずにはいられませんでした。

衛生兵であったために命拾いをさせて頂き、あちらこちらと見学もさせてもらい、貴重な体験をさせて頂きました。衛生兵であったが故に広島島の原爆被災者の治療をさせて頂き、その上終戦後も国

るで生き地獄の様相でした。病院に勤務しながら、入営以来歩いて来た道を振り返って見ました。

昭和十六年十二月の暮、父も母も元気で涙一つ出さず見送って下さって、新発田の第七十六連隊に入隊。広島県の宇品港から輸送船で北支の塘沽に上陸し、塘沽から青島へ、青島から塘沽そして上海へ、上海から基隆港を経由してフィリピンのマニラへ、不安の中で南海の波濤を乗り越え、赤道を越えて一番遠い南の戦線ラバウルで、空から海から連日攻撃を受け、米なしの食事三日間、椰子の根と爆撃で浮いた魚を食して過ごしたラバウルの三カ月間。

下士官候補生に選抜されたおかげで、地獄の戦線から脱出して内地へ、その輸送船も途中で乗り換えたため、最初に乗った船は古かったために沈没し、乗り換えたために無事到着。広島での教育訓練の前に自宅に帰ることが出来たが、父は五十歳で死亡しておりました。母は私の姿を見て幽霊が帰って来たのではと驚きながらも、泣いて喜ん

立病院に勤務することが出来ました。

昭和二十一年十二月、広島市の国立病院から東京都世田谷の国立病院に勤務することになりました。昭和二十四年十二月、国立病院を無事退職しまして、十二月二十五日、中野区中野三丁目三三一―五号にナカノ薬局を開局し現在に至っております。二度とあの悲惨な戦争を繰り返してはならないと念じながら元氣でがんばっております。